

小田地区の伝説

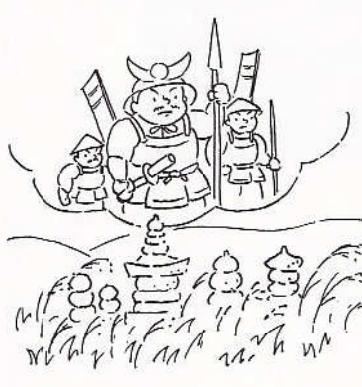
千人塚

昔、小田の城へ敵が攻めてきたことがあつた。城には兵が少ないのに、どうしたものかと考えたんじや。真光寺のお尚さんが

言うには、大般若經というありがたいお經をとりでに立てかけて、仏さんのお力にすがるしかないということじやつた。

不思議なことに、敵にはお經に書いてある文字の一つ一つが、小田の兵に見えたんじや。人手の少ない城と思っていたが、何千人の兵がとりでを守つているようすを見た敵の兵の隊長はびっくりしたんじや。「これじゃあなんぼにも負けてしまう。攻めれば負けるし、かといって逃げて帰るわけにもいかん。ここでいさぎよく死のう。」といつて、自決したということじや。小田の人は、この戦人(千人)の首をていねいにまつって一本の榎を植えたんじや。ここを「千人塚」とも「首塚」ともよぶようになったんじや。また、なかには袴を脱ぎ捨てて逃げた者もおつたので、その峠を「袴峠」とよんだるんじや。

また自決した丘には、「胴塚」があつて、今でも土盛りの上には、宝きょう印塔や五輪塔があるんじや。



淨樂寺の靈泉

小田の下隠地に薬師如来を本尊にしたお堂があります。昔は大そうにぎやかにお祭りもあつたそうで「おやくしまん」といって親しまれていたそじや。そのころ、この近くに「らく」という娘が住んだつた。

お母さんが眼が悪うて困つとつたので、日頃から信仰している薬師さんに願をかけて、毎日お参りをしどつたんじや。ある時、岩の間からわき出た水辺に白い鳥がいて、眼を痛々しそうにしながら、なんべんも水の中に首をつこんでは上げているのを見たんじや。

やがて、白い鳥は見る見る元気になり、眼もすっかり治つたようすで、西の空に飛んで行つてしまつたんじや。らくはお母さんをつれてきて、池の水で毎日眼を洗つたんじやと。そうしたら見る見るよくなつたということじや。眼病にきく池の水は評判になつて、遠くからもこのやくしさにお参りにきたそじや。

ある時、このやくしさが、火事になつたことがあつた。しかし、この池の水をひしゃくで二、三ぱいかけると、たちまち火は消えたそじや。不思議なもんじやのお。

